

くらし

西日本新聞

鹿児島発の竹紙 広がるコラボ

沖縄の食品企業がギフト箱に 推進の印刷会社インキも開発

里山の竹林の手入れを促そうと竹製の紙の普及に努めている鹿児島発の取り組みに、沖縄県の食品企業が呼応し、環境保全に配慮したコラボ企画が実現した。3年前に起きた首里城火災の後、鹿児島からも届いた支援の声に「何か恩返しを」と生み出されたのが、沖縄そば用の竹紙製ギフト箱だ。温かな心の交流の賜物は日本パッケージングコンテストでも高く評価された。(フリー記者・竹島真理)

竹紙製のギフト箱を企画したのは、沖縄県内大手の食品製造業「オキコ」(銘町敏明社長)。製作依頼を受けた鹿児島県日置市の印刷業協業組合「ユニカラー」(岩重昌勝代表理事)は、鹿児島発の竹紙普及推進役を自任するユニークな企業だ。

ギフト箱(縦18センチ、横24センチ、高さ14センチ)は竹紙100%の段ボール製。沖縄そばのゆで麺とストリートスープなどのセットが4食分入る。やさしい色調の朱色と黄色を基調に、琉装の女性を描いたレトロなデザインだ。「温かみのある朱色は、首里城と、沖縄県の花デザインをイメージしたものです」。そう話すのはオキコ商事事業部の営業課係長、屋良恵美子さん(38)。

この発端は2019年10月の首里城焼失という痛恨事にさかのぼる。「私たち沖縄県民は本場にシヨックでした」。その後、再建に向けて鹿児島など各地から木材提供の申し出が相次いでいると知り、「とてもあり

がたく思っていました」。ちょうどその頃、同社を訪れた旧知のユニカラー営業部長、生野忠男さん(56)に、九州で放置竹林が増えている実情や竹紙の取り組みの話聞いた。沖縄ではモウソウチクはほとんど目にしないが、屋良さんは「木材提供を申し出てくださった鹿児島島のお役に立てれば」と、竹紙の使用を思い立った。

同社は「地域同士がつながるようなものづくり」を大事にし、県内市町村の特産品、マンガや島ニンジンなどを使ってパンを開発したり、規格外の農産物を製菓材料として生かしたりしてきた。「鹿児島島の竹紙を使ったギフト箱製作は、その延長です」

生野さんは、その心意気に感激。より付加価値の高いギフト箱とするため、その印刷には、インキメーカー「サカタインクス」(本



日本パッケージングコンテストで入賞したギフト箱。ふたの差し込み口は沖縄の「やちむん」(焼き物)のどんぶりの形をしている



ギフト箱には、里山再生や環境保全に貢献するため、国産の竹材を活用していることを伝えるメッセージも



ギフト箱を企画したオキコの屋良恵美子さん(右)と新垣恒司さん。炊き込みご飯の素も入ったセット(送料・税込み5100円)をPR中だ

記者に託された体験者の言葉
地べたの戦争
お求めは書店で
西日本新聞社の本

2022年
9月21日
(水曜日)

スポーツ立県福岡
福岡県のスポーツ・文化活動を応援します

部活ガンバ
× 西日本新聞
www.bukatsuganba.com

子ども達の笑顔のために!

部活ガンバ

西日本新聞社

社・大阪府、東京都)と共同開発した竹炭インキプラックを、初めて使った。竹材を加工する際に出るおがくずが原料で、両社で昨年8月に製品化したばかり。従来のカーボンブラックのインキは、重油を燃やして出るすすをインキ用に調整して原料にする。竹炭を配合すれば、石油系物質の使用を減らせるため、鹿児島県内の加工業者が竹炭化したおがくずの粉を10%配合している。

カラーインキにも植物由来成分を使用したサカタインクスのボタニカルインキ

生野さんは「ギフト用として全国に発送されるこの箱が、沖縄と本土を結ぶ、ワクワクするような玉手箱になれば」と夢を描く。

屋良さんは「一緒にものづくりをさせていただいた私たちも受賞は誇らしく、関わってくださった方々に感謝します。この箱を手にとられたお客さまにも、竹林のことに思いをはせていただけたら」と願う。

今後も環境保全や持続可能な開発目標(SDGs)につながるものづくりを意識していくというオキコ。インスタントラーメン用のギフト箱にも竹紙を使うとユニカラーとデザインを企画中で、完成も間近だ。

鹿児島発、竹チップ100%使用の紙 竹林面積が全国1位の鹿児島県で、1998年から竹林所有者らとチップ工場、薩摩川内市にある中越パルプ工業(本社・東京、富山県)の川内工場が連携。伐採したモウソウチクを製紙原料に活用し、2009年から竹チップを100%使った「竹紙100」と10%配合した製品を多く、過疎化や高齢化などで手入れが行き届かずに放置竹林も増え続け、地域の課題となっている。

健やか食環境